

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「居間」という空間について (私のスケッチ・ブック (1))

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005884

「居間」という空間について

国立民族学博物館

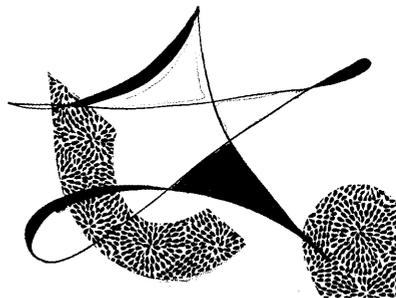
森 明子

居間ということばがある。いわずとしれた住まいの一室を示す語であるが、その一室はどのような空間かとあらためて考えてみると、これが一筋縄ではいかない。

だいたい、居間ということばをあまり使っていない気がする。リビング・ルームのほうが多い。個人については差があるだろうが、不動産関係をはじめとして、世の中に流通していることばとしては、リビングのほうが優勢であろう。

畳から床へ造作がかわり、ソファを置き、カーテンをあしらい、スリッパをはく洋間は、居間という漢字表現よりもカタカナのほうがふさわしいという感覚があるのだろう。しかし、それだけでなく、居間ということばのすわりのわるさは、近代住宅の居間空間が、西欧からの輸入モノであることと関係しているように思える。居間と呼ぶにしろ、リビングと呼ぶにしろ、この空間は、どうも私たちの生活に、根をおろしていないような気がするのだ。

私たちは、物質、ものの考え方、生活様式の全般を西欧近代から輸入し、模倣し、その多くを日本のものにつくりかえてきた。それが独特の味わいのあるものになった例もあるし、ほころびのみえるものもある。その中で居間は、近代家族とともに十分に成熟する前に、現代世界の大浪に呑み込まれて浮遊して



いるようだ。リビング・ルームという英語表現へのひきもどしを、そのような脈絡で理解しても、あながち間違っているといいきれないのではないだろうか。

たとえば、「茶の間」という言葉を思い出してみればいい。これは、日本の民家の一室をさすことばである。民家の間取りをさす言葉は、ニワ（土間）、チャノマ（囲炉裏のある空間）、ネマ（ナンド）、デイ（ザシキ）、ダイトコ（カッテ、ナガシバ）を基本とする。

生活の変化とともに住宅の形態はかわり、呼称も変化しているが、チャノマは私たちの世界で現在も通用する、歴史のある言葉である。アニメーションのサザエさんで、誰でも真っ先に思い浮かべる空間は、一家が食事する「チャノマ＝茶の間」であろう。あれを居間と呼ぶ人はめったにいないはずだ。サザエさん一家は、現代家族とはいいいがたいが、さ

りとして伝統家族でもない。日本家屋の住宅構造に、近代的な生活様式を取り入れて、三世代家族を営んでいる。その生活の中の家族団らんの空間は、私たちにとって、居間というより茶の間と呼んだほうがしっくりいくのである。

広辞苑をひくと「居間；（家族が）ふだん居るへや、居室」とある。このような居間の考え方は、西欧から輸入されたものである。日本語に居間ということばがなかったわけではない。貴族や武家の住宅様式である書院造りでは、家の長が住む上段の間を「お居間」と呼んだ。

ヨーロッパにおいても、近代以前にはこれと同様の用法があった。「マリー・アントワネットの居間」というような場合で、個人、とくに偉い人の私室という意味がある。このような主だった人の居室としての居間は、現在の居間という語の用法とは反対である。

近代住宅に取り入れられた居間は、家族、場合によっては来客も集まって団らんする、共有空間を意味する語である。

庶民の住宅ではどうだったろう。日本の民家において、チャノマという空間があったことは、すでに述べたとおりである。チャノマには囲炉裏がきられていて、それは作業場としての二つに連続した空間だった。囲炉裏ばたで食事をするし、仕事もした。また囲炉裏ばたは、家族と客の座が決められていて、親しい訪問者を接待する空間でもあった。昔話が語られたのも囲炉裏ばたである。このような囲炉裏のあるチャノマを、現在の私たちは失っている。

では、居間とはどういう空間であるのだろうか。あらためて考えなおしてみると、私たちの住宅には、居間と呼べる室があるのか、そもそも居間があった時代があるのか、ということもわからなくなるのだ。

ここで、近代西欧の居間をよくあらわしている例をあげよう。

『歌うトラップ一家』という物語に、次のような一節がある。トラップ一家とは、映画『サウンド・オブ・ミュージック』の物語のモデルになった家族で、この本の著者は、ジュリー・アンドリュースが扮したマリア・トラップ男爵夫人である。以下の引用箇所は、マリア夫人が結婚する前、家庭教師として、オーストリアのザルツブルクにあった一家の邸に住んでいるとき、男爵（大佐）とかわした会話である。

「…この家には居間がありませんから、…」

…大佐は突然、顔をしかめた。

「さっき、この家には居間がない、とおっしゃったのは、どういふつもりですか」

「別に深い意味でいったものではありませんが」

「大きい応接間、小さい応接間、図書室、音楽室があればよいではありませんか」

「いいえ、居間というものは、もっと違う部屋です。……おとうさん、おかあさん、子どもたちがいっしょに生活する部屋を居間というのです。仕事や読書や遊びごと、手紙書きもする部屋のことですわ」

この会話の後、マリアは男爵と結婚し、結



婚後の一家の生活場面として、次の描写がつづく。

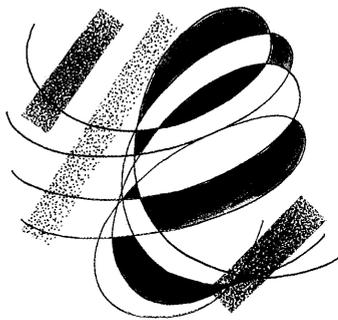
…夕食後は団らんのひとときで、每晚いっしょに過ごした。暖炉には火がたかれ、上の娘は編み物を持って、下の子は人形を抱えて集まった。男の子と父親はふつう、木を削ったり彫ったりして遊んだ。私は一番楽なはずに座って、声を出して本を読んだ。仙女の話や伝説や歴史小説、伝記物、そして散文や詩の名作など。二、三時間も読むと、私はこう言うのがお決まりであった。

「きょうはこれまで。さあ、また歌いましょう。よくって？」

居間がなかった住まいに、主婦が加わることによって居間が生まれたことが、生き生きと描かれている。美しい家族愛、美しい歌声、美しいアルプスの風景、すべてが美しく、やや鼻白む気がしないでもない。しかし、なんの^{でも}欲いもなく自分が良いと信じていることを自信に満ちて描いているゆえに、いやらしくもなく、またそうできるところが魅力でもある。日本人ならこんな文章は書かないだろう。

それはともかく、居間で家族が何をしているかに注目しよう。編み物、人形遊び、木彫り、読書、歌。この場面設定を理解するうえで、この物語が、富裕な中産市民階級のモラルを奉じていることを、確認しておく必要がある。

トラップ氏は男爵ではあるが、それは軍人として輝かしい軍功をたてたことによるものであって、もともと貴族の家に生まれた仁ではない。マリア夫人はウィーン生まれで、自分の努力で教育を積んだ女性である。物語には随所に、貴族の形式主義を批判する市民階級のモラルが見られる。居間で家族が編み物



や木彫り、読書をし、団らんすることは、よそよそしい貴族の家族にはない、理想的な市民家族のいとなみとして描かれているのである。市民家族に対比されているのは、貴族の家族であり、農村家族ではない。

では農村家族ではどうだろうか。オーストリアでも、農村家族のもとでは、トラップ一家のような居間はみられない。

オーストリアの民家の間取りを名付けるとき、必要な言葉は、台所、寝室、シュトゥーベ、カンマーおよび前室である。前室とは、玄関をはいったところの空間で、そこから各室に通じる。シュトゥーベとカンマーの意味するところは、前者が暖房のある部屋、後者が暖房のない部屋である。

冬の厳しいこの地方で暖房は必須であるが、どの部屋にも暖房をするというわけではない。暖房をする部屋としない部屋は区別され、前者が人の集まる居室であり、後者は主として食物貯蔵などに利用された。ひとつの部屋だけを暖房することは節約の工夫でもある。食事をとったのも、屋内の仕事をしたのも、訪問してきた客人をもてなしたのも、要するにシュトゥーベだった。このようなオーストリアの風景は、ただちに日本の囲炉裏ばたを想起させる。

興味深いのは、冬のシュトゥーベで、家が何をしてきたかということである。私が

滞在していたオーストリアの村の老人は、子供時代を回想して次のように語った。

「古い家には、ひじょうに大きなシュトゥーベがあった。冬は、そこに家中の者が集まって仕事した。

男の奉公人も女の奉公人も、みんなそこにいた。男は木の仕事をした。椅子の修理などだ。女は羊毛を糸繰り車を使って紡いだり、編み物をしたりした。あんなに大きな部屋は現在はない。いまの家全体分くらい大きかった。」

この回想は、第二次世界大戦の頃の思い出で、トラップ一家の時代とほぼ重なる。農家のシュトゥーベと、トラップ一家の居間ではほとんど同じことが行われていたのである。

違いは、農家ではそれを仕事として行っていたのに対し、富裕な市民であるトラップ一家では、それは仕事とは明確に区別された「家族の団らん」として行っていたということである。

そしてもうひとつの違いは、トラップ一家において、この空間を構成したメンバーが家じゅうの者ではなくて、召使いを除いた主人の家族に限られていたということである。西欧近代の家族は、料理人と女中が家事を担当することで、主婦を家事労働から解放し、それによって自由になった時間を、家族が居間で過ごしたのである。

さて、居間ということばのこのような背景から見たとき、私たちの住まいについて、何が見えるだろう？

西欧においては、貴族の家族に対する反省から、市民階級の家族のモラルが展開し、居間はそのような家族団らんに配置されたものだった。私たちはその過程を飛び越えて、近代住宅における居間空間を輸入している。トラップ家の物語は、たしかに美しいが、たと

えば食後「さあ、歌いましょう。よくって？」などとやられたら、私は逃げ出してしまいたくなる。

はつきりいって、トラップ一家のような居間は、私たちの手にあまる。私たちには、家事をやってくれる召使いはいない。理想とするのはサザエさんの茶の間、といいたいのだが、核家族世帯には、それも絵に描いた餅である。忙しい現代世界の時間を生きている私たちの生活では、特定の目的に貢献しない時間も、空間も、削ぎ落とされていく。その流れを止めることはできない。

それでも、どの家にも、その家の臍のようなものはどこかにあるようだ。そんな空間を少し視点をかえて眺めてみる。

適当に片づいていて、使いやすい程度にちらかっている。何がどこにあるかはわかる程度の整頓は保たれていて、その程度は、その家の家事をとりしきる人の性格を反映している。そういう部屋は、結局、訪問客に対しても開かれていて、人を呼ぶ空間になるようだ。

オーストリアの農村では、それは結局ダイニングキッチンであることが多かった。ウィーンなどの都市に行くと、リビング・キッチンが多かったように思う。

私たちの現代住宅も、そのあたりのどこかに着陸地点を見つけつつあるように思える。

●著者紹介

文化人類学専攻。オーストリアと日本で、フィールドワークを行っている。著書に『土地を読みかえる家族—オーストリア・ケルンテンの歴史民族誌』（新曜社）ほか。
国立民族学博物館助教授。文学博士。

